

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：25101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885068

研究課題名(和文)環境社会報告書の記述的表現に関する理論的・実証的研究

研究課題名(英文) Narratives on Corporate Environmental Social Reporting: Empirical Analysis and Theoretical Framework

研究代表者

中尾 悠利子 (Yuriko, Nakao)

公立鳥取環境大学・経営学部・講師

研究者番号：50738177

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：(1)環境社会報告における記述的表現の分析アプローチの検討、(2)環境社会報告の記述的表現とESG(環境・社会・ガバナンス)パフォーマンスとの関連に関する実証分析、の2点の研究を行った。(1)では、記述的表現の2つの分析アプローチであるコンテンツ分析と解釈的テキスト分析に対して、環境社会報告の記述的表現の研究の分析アプローチとその結論に関する考察を行った。(2)では、「トップメッセージ」、「環境報告」、「社会報告」の3カ所の記述的表現を分析対象とし、ESGパフォーマンスとの関連を実証的に分析した。その結果、ESGパフォーマンスやステイクホルダー等と記述的表現との影響を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research objective has the following dimensions: (1) Considering methods and results in corporate environment and social narrative reporting research, (2) Corporate environment and social reporting narratives: Empirical analysis of Japanese companies. (1) Examination of analysis approach and results obtained through narrative reporting, compared with the approach of content analysis and interpretive text analysis. (2) We investigate CEO statements, environmental information, and social information in the environmental and social reports of Japanese companies for a two-year period. The results show a tendency to use an optimistic and ambiguous tone in CEO statements. Further, some stakeholders such as consumers influence the narrative tone of reporting.

研究分野：社会科学

キーワード：環境・社会報告 サステナビリティレポート 記述的表現 テキスト分析

1. 研究開始当初の背景

企業情報開示の領域において環境社会報告の重要性は指摘され、ガイドライン等の影響もあり我が国では1990年代後半から普及が進んでいる。しかしながら、環境社会報告は財務報告とは違い任意での情報開示であるために、その記載内容や記述的表現は企業の自由裁量に委ねられている。しかしながら、記述的表現を巧みに利用することで、企業の環境社会活動の実態が正しく伝えられていないのであれば環境社会報告それ自体の信頼性に関わる大きな問題となる。そこで、環境社会報告の記述的表現にどのような要因が影響されているかを明らかにすることが必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本企業の環境社会報告の記述的表現がどのような要因によって影響されているのかを明らかにし、環境社会報告の記述的表現がステイクホルダーとのコミュニケーションを促進する上での課題を究明することを企図している。これの課題に対して2つの領域に分かれる。

- (1) 環境社会報告の記述的表現の先行研究は財務報告のそれと比較するとその数は少なく、したがって、その方法論と結果の意義が体系的に示されていない。そこで、環境社会報告における記述的表現の分析アプローチの側面から記述的表現研究の方法論とその結果に関する研究課題を検討する。
- (2) わが国の環境社会報告を対象とし、環境社会報告の記述的表現に対してESG（環境、社会、ガバナンス）パフォーマンスやステイクホルダー、産業などの影響により、レトリカルな表現を使用し、読者であるステイクホルダーに対して実際の活動よりもより良く見せようとする印象管理（Impression Management）がなされていないかどうかを検証することを目的とする。

3. 研究の方法

上述の2つの目的に対して、次の研究方法を採用した。

- (1) 環境社会報告の記述的表現の研究を行う上でどのような方法論があるのかを概観するため、既に研究が蓄積されている企業情報開示の方法論に着目した。この分析アプローチでは、実証主義に基づくコンテンツ分析と社会構築主義に基づく解釈的記述的分析とに区分を行い、それぞれの言

葉の捉え方や分析手法の違いを示している。本研究では、この分析アプローチに対して環境社会報告の記述的表現の研究がどのような分析アプローチを採用し、どのような結論が得られているかの考察を行った。

- (2) 環境社会報告の「トップメッセージ」、「環境報告」、「社会報告」の3カ所の記述的表現を分析対象とし、それぞれの報告箇所に対応するESG（環境、社会、ガバナンス）パフォーマンスとの関連を実証的に分析する。加えて、ESGパフォーマンス以外にも記述的表現に影響すると考えられる要因として、ステイクホルダーや産業、ガイドライン等の影響を取り入れた。

4. 研究成果

前述の2つの研究目的、研究方法を採用した結果は次の通りである。

- (1) 企業情報開示で提示されている分析アプローチであるコンテンツ分析と解釈的記述的分析に対して環境社会報告の記述的表現の研究では具体的にどのように分析が行われ、どのような結論が得られていたのかを見てきた。コンテンツ分析のアプローチをとった研究では、「言葉」を客観的に捉え、その言葉の質がどのようなものかを先行研究の理論や仮説に基づいて分析が行われていることが分かった。それらの研究では、ステイクホルダーごとに情報開示の使い分けを行っているとの結果が得られた研究や財務パフォーマンスの悪さと読みにくさが関連していることが示された研究、悪いパフォーマンスの時に楽観的なトーンの表現を使用することを示した研究、将来の環境パフォーマンスに対して楽観的なトーンの表現は避け、情報の非対称性を解消することを示した研究等の分析結果があげられた。本研究で対象としたすべての研究の分析結果に一定の傾向があるとは言えないものの、環境社会報告の記述的表現として、ステイクホルダーへの情報開示の使い分けや悪いパフォーマンスの時に楽観的なトーンの表現を使用するなど、コンテンツ分析の研究結果からは環境社会報告の記述的表現の使用に関する信頼性を高めるとは言い難い結果が得られた。解釈的記述的分析のアプローチの研究結果からは、コンテンツ分析のように環境社会報告における信頼性や有効性などの課題に対して直接的に示唆を与えてい

るものとは言えないことが分かった。しかしながら、環境社会報告の研究分野では、企業の環境活動や社会活動の実践を記述することもあり、その活動に影響を与える制度的変化やステイクホルダーからの影響が大きい。したがって、解釈的記述的分析のアプローチの意義として企業の環境社会分野への実践や姿勢、対応を言葉の解釈から明らかにすることが可能である点があげられる。このように「言葉」を用いることによって読者への印象を変えることや、企業の実践が時系列や外部のステイクホルダーによってどのように影響されるのかについて記述的表現の分析を実施する事により、ただ単に記述的表現の2つの分析アプローチによる異なる結果が得られただけでなく、環境社会報告の大部分を占める記述的表現に関して違う視点での解釈が得られることが示唆された。このことは、環境社会報告は制度的な開示ではなく企業の自主的な情報開示をもとに発展してきた経緯があり、それらを理論的及び実証的に解明する研究が展開される中、環境社会報告の記述的表現における研究結果の示唆は、環境社会報告の実際の書き手である「言葉」や読み手であるステイクホルダーからの影響を明らかにしたものであり、このことから環境社会報告の研究領域に対して新たな示唆が得られる可能性が高まることと言える。

- (2) 日本企業の環境社会報告を対象に、パフォーマンスやステイクホルダー、環境社会報告の開示自体の積極性や産業の特性が環境社会報告の記述的表現に対してどのように影響を及ぼすのかについて実証的に分析を行い、統計的な結果を示した。特に、環境社会報告の主な3つの開示側面である「トップメッセージ」、「環境報告」、「社会報告」を対象として分析を行った。先行研究の結果と同様に、パフォーマンスの悪い時に楽観的で曖昧な表現を使用する傾向が示されたのは、トップメッセージのみで、環境報告や社会報告に関しては、悪いパフォーマンスと記述的表現との関係については明らかにされなかった。トップメッセージに関しては、環境・社会報告と違い、表や図を用いた活動実績の報告はそもそも存在しなく、記述的表現を中心とした報告パートとなる。そのため、言葉のトーンや単語の選択による読者への印象管理が行われる誘因が環境・社会

活動の報告パートと違い起こりうる事が分析結果から示された。他方で、環境報告や社会報告では記述的表現への影響について先行研究のようにパフォーマンスによるものではなく、ステイクホルダーやガイドライン、産業等での企業特性による影響が示された。これは環境報告や社会報告はその活動実績や指標の開示とともに記述的表現が使用されることもあり、事実に基づき、活動実績への読者の解釈を促進させるような表現が適切に使用されることが良いと考えられるが、特定の企業によっては記述的表現に楽観的で曖昧な表現や確からしい表現を使う傾向が見られることは、一部分の表現次第で読者の誤解を生じさせかねないことが懸念される。このように環境社会報告の報告箇所別、外部への積極的な情報開示の実施や産業の特性による記述的表現のレトリカルな使用の違いを明らかにした。この点は環境社会報告の定量的記述的表現分析の研究領域における新しい貢献と言える。加えて、これらの結果より、環境社会報告の信頼性を議論する際に、環境社会報告のパフォーマンス情報(たとえば、温室効果ガス排出量)の保証に関する検討は活発であるものの、記述的表現の信憑性に関する議論はなされておらず、パフォーマンス情報の解釈を促す適切な記述的表現のあり方を検討し、環境社会報告をマルチステイクホルダーとのコミュニケーションを深めていくことの重要性の指摘につながる事と言える。

5. 主な発表研究等

〔雑誌研究〕(計2件)

- ① 中尾悠利子・西谷公孝・國部克彦「社会・環境パフォーマンスと記述的表現の関係性：社会環境報告書の分析を通して」『会計』第185巻第6号、68-81頁、2014年、査読なし
- ② 中尾悠利子「環境社会報告の記述的表現の研究の方法と結果に対する考察」『鳥取環境大学紀要』第13巻、31-40頁、2015年、査読あり

〔学会発表〕(計4件)

- ① 中尾悠利子「環境社会報告の記述的表現の研究の方法と結果に対する考察」日本社会関連会計学会(第27回全国大会)2014年10月4日、関西大学
- ② 中尾悠利子「サステナビリティ報告のテキスト表現分析」日本社会関連会計学会(第28回全国大会)2015年10月25日、

亜細亜大学

- ③ 中尾悠利子「サステナビリティ報告のテキスト表現分析」2015年度 第3回 日本組織会計学会研究会 2015年12月19日、国土館大学
- ④ 中尾悠利子「サステナビリティ報告のテキスト表現分析」神戸 CSR 研究会第67回例会 2016年09月26日、エートス法律事務所

6. 研究組織

(1)研究代表者

中尾悠利子 (NAKAO, Yuriko)

公立鳥取環境大学・経営学部・講師

研究者番号：50738177